

今こそ三観の確立を

一徹国語人

どの教材の場合でも、学習を展開するに際して、学習計画を立てる前に教師が確立させておく必要のあるものが三つある。

その一つが「教材観」とよばれるもので、教材の内容や特性の十分な理解である。

学習する単元の指導目標を視点としたとき、その教材には、いくつぐらいの、どのような学習素材が潜んでいるのかを的確に分析把握しておくことがまず大切である。

国語学習の場合は、普通、登場人物の様子や気持ちを読み取る場合でも、文章の要旨を読み取る場合でも、次の、いくつかを組み合わせて深く教材理解をするように。

まずは全文を視写。やってみると、教材の特質や言葉の配置のすばらしさがよく分かってくる。視写した本文のあちこちから、分析視点に沿った書き込みをする。それから、キーワードを組み立てて全体構造図にする。あ

るいは、小見出しを段落ごとに立てて内包円枠図にしてみてもいい。

分析した後、この教材を学習する児童たちの特性（学習体験の質と量、現在の読み取り能力の程度、生活上の個性、趣味や興味のもち方の傾向など）を視点として、再びとらえ直してみる。

つまり、この教材を学習するに際しての児童の特性分析である。「児童観」という。

三つには、何時間ぐらいかけて、どのような方法で学びの場を構成したらよいかを考える。

児童の興味・関心を持続させながら、目的の力を身につけさせるための方法を分析し、明示する。これを「指導観」という。

先生になって一年もすると、自分に合った学習展開法が自然と身につく。したがって、ことさらに事前の分析

処理をする先生は少なくなるのだが、最近では、初任の先生でもこの三観分析明示をする人が少ない。

ワークシート・学習ドリル・学習プリント・ワークテキストといった豊富な学習材が市販され、校内設備としての機器が発達し、そのついでに、細やかな指導法を載せた指導書が各先生個人に配布されている現代は、学習を成立させるために必要な基本作業としての三観の分析明示をしないで、学習を開始してしまうことが多い。そんな中で、児童の関心と教材の特質を理解せずに学習に入ってしまうと、時間だけは流れていくが、学習指導をした

ことには少しもならない。初めて教材を目にした児童が発した感動の声を聞き漏らしたり、上手に分析できなかったりする教師があまりにも多いことが悲しい。児童に丸投げし、上がってきた児童の声（反応）の中から適当にいくつかの語句を選んで板書しさえすれば、一応は学習のスタイルとなっていく。そうしたことを何回か繰り返していくうちに、教師は自分の形のようなものができあがったのだと思い込んで、その形なるものにも事前分析をしない、自分自身にも恥ずかしいとは感じなくなる。

新しい学習指導要領が文部科学省から示され、それに沿って編集された新しい教科書が平成十四年度から各学校の児童のもとに届いている。そして、この学校でも

新たに教育課程を編み、学習指導実践を進めている。

そんな今、私は多くの学校へ出向き、毎日のように国語の授業を参観しては、その教材分析法や児童分析法、学習展開法等について助言をしている。

国語学習の研究を全校あげて取り組んでいる学校は実に多いのだが、着実に分析し、それに基づいた学習計画を立てた実践に出会えることはそう多くはない。検討すべき課題は多い。しかし、「教材観」のところでも書いてきたが、何よりもまず必要なのは、何度も何度も教材を読むことだと思つ。

児童の学びを確かなものにするためには、まず、教師の学びを着実に進めることが大切だとつくづく感じると同時に、期待もしている。

